



立教大学

平成28年1月12日
教育課程部
外国語ワーキンググループ
資料 4



TOP GLOBAL
UNIVERSITY JAPAN

中学校・高等学校の指導の 現状と改善の方向性

立教大学グローバル教育センター長

松本 茂

2016年1月12日

文部科学省

中央教育審議会初等中等教育課程部会外国語WG（第5回）

改善されつつある点

- ⌘ 英語での指導（高等学校においては「授業は英語で行うことを基本とする」）の浸透
- ⌘ 生徒主体の言語活動の増加
- ⌘ 学習到達目標としてのCan-Doリストの作成と活用
- ⌘ パフォーマンス評価（特に「話すこと」及び「書くこと」において）の採用

学習環境上の問題点

- ⌘ 中学：クラス内の能力差の大きさ
- ⌘ 高等学校：学校間の能力差の大きさ
- ⌘ ICT環境、図書室の貧弱さ
- ⌘ 1クラスの生徒数の多さ
- ⌘ 国際的多様性の欠如（生徒及び教員）
- ⌘ 授業、部活動以外の空き時間のなさ

改善すべき方向性

スピーディに改善されるべき点

- ⌘ 国としての小・中・高一貫した技能別の目標設定(指標形式の目標を含む)と、その実効性を高める
- ⌘ (高等学校)4技能統合型の授業に向けた科目の再編成
- ⌘ 4技能統合型の授業を行うための教材開発

① ゴールの明確化

⌘ 国： 技能ごとに能力記述文による高等学校卒業時点での最低限の学習成果（到達指標）を大まかに示す

→ 実効性の高いものにとするために
学習指導要領に明記する

⌘ 設定は、高等学校→中学校→小学校の順で検討する

① ゴールの明確化

- ⌘ 高等学校の必修科目でCEFRのA2レベル、選択科目でB1レベルとし、スーパーグローバルハイスクール(SGH)等では学校設定科目や学外での活動などを活用してB2レベルを目指す
- ⌘ 各学校：国が示した到達指標に基づいて、学習到達目標を(より具体的に)設定する

(参考) 外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠について

- CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment) は、語学シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集、外国語運用能力の評価のために、透明性が高く、分かりやすい、包括的な基盤を提供するものとして、20年以上にわたる研究を経て策定された。欧州域内外で使われている。
- 欧州域内では、国により、CEFRの「共通参照レベル」が、初等教育、中等教育を通じた目標として適用されたり、欧州域内の言語能力に関する調査を実施するにあたって用いられたりするなどしている。

熟練した 言語使用者	C2	聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細な文章を作ることができる。
自立した 言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。
	B1	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。
基礎段階の 言語使用者	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

(出典) ブリティッシュ・カウンシル、ケンブリッジ大学英語検定機構

平成26年度高校3年生英語力調査結果

○「読むこと」「聞くこと」は、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）A1上位からA2下位レベルに集中。

○「書くこと」の得点者は全体の約70%（無回答：29.2%）、「話すこと」の得点者は全体の約85%（無回答：13.3%）で、課題が大きい。

【生徒全体のスコア分布】

<読むこと> 43問（約45分）

CEFR	得点	Reading	割合
B2	320	77	0.2%
	310	18	
	300	27	
B1	290	37	2.0%
	280	69	
	270	82	
	260	107	
	250	157	
	240	195	
	230	317	
	220	420	
	210	561	
A2	200	778	25.1%
	190	1124	
	180	1477	
	170	1956	
	160	2610	
	150	3545	
	140	5245	
A1	130	8192	72.7%
	120	11790	
	110	12508	
	100	9796	
	90	4698	
	80	1823	
	70	604	
	60	208	
	50	76	
	40	51	
	30	19	
	20	2	
	10	0	
	0	285	
平均	129.4		
調査対象	68,854		

<聞くこと> 36問（約25分）

CEFR	得点	Listening	割合
B2	320	175	0.3%
	310	50	
	300	70	
B1	290	68	2.0%
	280	109	
	270	126	
	260	160	
	250	227	
	240	256	
	230	341	
	220	454	
	210	615	
A2	200	748	21.8%
	190	992	
	180	1241	
	170	1731	
	160	2199	
	150	2996	
	140	4034	
A1	130	5438	75.9%
	120	7684	
	110	8831	
	100	9026	
	90	7840	
	80	5782	
	70	3474	
	60	2125	
	50	920	
	40	396	
	30	189	
	20	106	
	10	99	
	0	352	
平均	120.3		
調査対象	68,854		

<書くこと> 2問（約25分）

CEFR	得点	Writing	割合
B2	140	2	0.0%
	135	0	
	130	3	
B1	125	7	0.7%
	120	33	
	115	45	
	110	175	
	105	578	
	100	222	
A2	95	608	12.8%
	90	1,183	
	85	946	
	80	1,804	
	75	1,736	
	70	1,971	
	65	1,816	
A1	60	2,347	86.5%
	55	1,978	
	50	2,516	
	45	2,111	
	40	2,417	
	35	1,988	
	30	2,497	
	25	2,080	
	20	2,258	
	15	2,167	
	10	2,562	
	5	2,913	
	0	30,089	
	平均	27.2	
調査対象	69,052		
0点	20,139	29.2%	

<話すこと> 3問（対面約10分）

CEFR	得点	Speaking	割合
B1	14	274	1.7%
	13	272	
A2	12	415	11.1%
	11	501	
	10	657	
A1	9	691	87.2%
	8	770	
	7	946	
	6	1185	
	5	1632	
	4	1105	
	3	1648	
	2	1450	
	1	2827	
	0	2210	
平均	4.5		
調査対象	16,583		
0点	2,210	13.3%	

※本調査では、便宜上A1～B2レベルまでを得点帯刻みに設定し分布を把握。

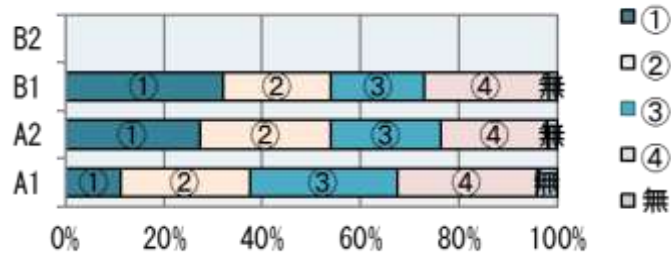
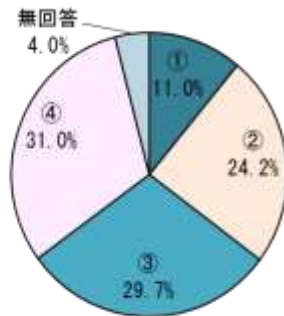
【試験結果と生徒質問紙のクロス集計】

4技能を通じた言語活動に対する生徒の意識

- 聞いたり読んだりしたことについて、英語で話し合ったり意見交換をした経験が少ない。
- 「話すこと」の試験結果が高いほど、授業において「生徒同士で英語で話し合ったり意見の交換をしたりしていたと思う」（選択肢①②）生徒の比率が高い（公立）。

問 第2学年での英語の授業では、聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で話し合ったり意見の交換をしたりしていたと思いますか。

① そう思う ② どちらかといえば、そう思う ③ どちらかといえば、そう思わない ④ そう思わない



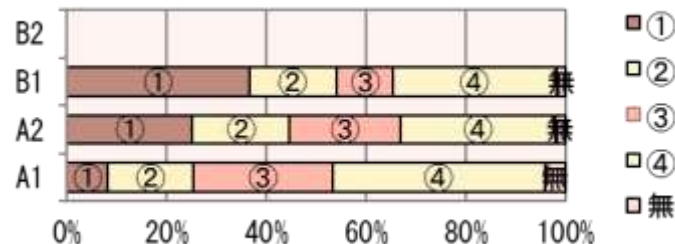
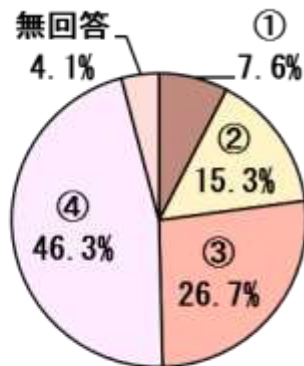
※「話すこと」の試験結果とのクロス。

4技能を通じた言語活動に関する生徒の取組状況

- 英語でスピーチやプレゼンテーションをした経験が少ない。
- 「話すこと」の試験結果が高いほど、授業において「英語でスピーチやプレゼンテーションをしていたと思う」生徒（選択肢①②）の比率が高い（公立）。

問 第2学年での英語の授業では、英語でスピーチやプレゼンテーションをしていたと思いますか。

① そう思う ② どちらかといえば、そう思う ③ どちらかといえば、そう思わない ④ そう思わない

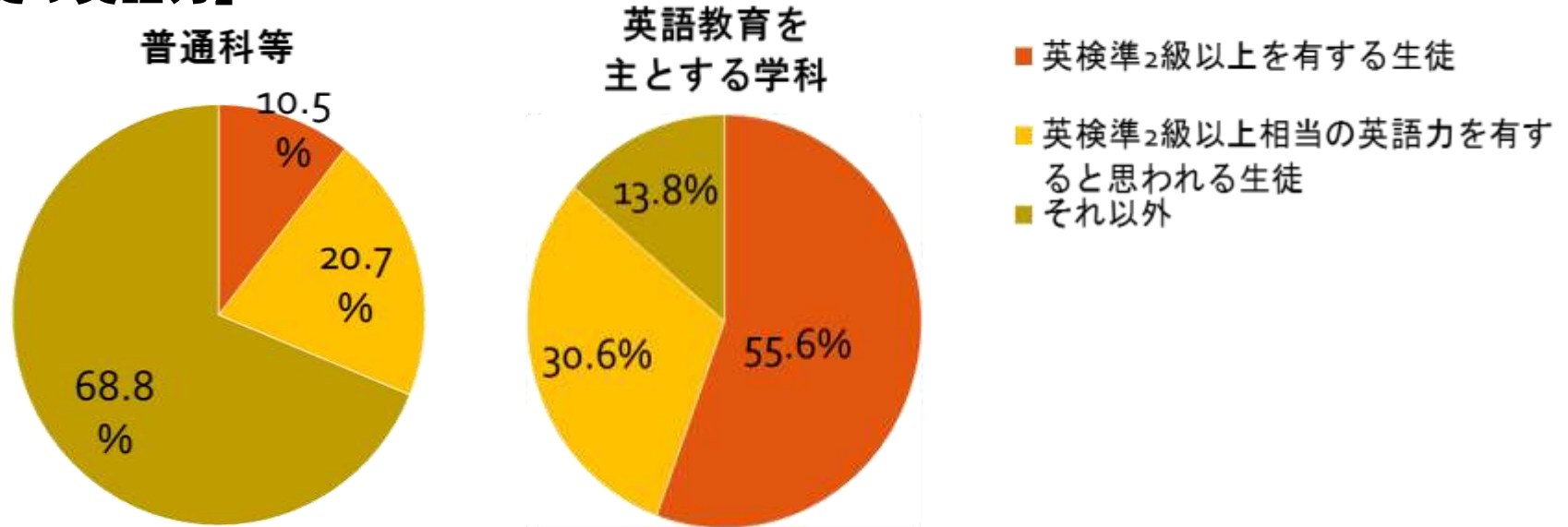


※「話すこと」の試験結果とのクロス。

高等学校の英語教育の現状（平成26年度英語教育実施状況調査より）

普通科と英語教育を主とする学科の生徒の英語力は多様

【生徒の英語力】



【授業における取組】

「コミュニケーション英語Ⅰ」の授業の状況	普通科等	英語教育を主とする学科
授業中、半分以上の時間、生徒の英語による言語活動を行っている英語担当教員の割合	42.6%	67.1%
授業中、半分以上の時間、英語による発話を行っている英語担当教員の割合	48.1%	68.3%

[参考] 諸外国における外国語教育の状況

出典文部科学省「平成25年度諸外国における外国語教育の実施状況調査」

		中国	韓国	台湾	ベトナム	日本
高校における教育目標		卒業時の目標：言語技能等5項目の到達基準「8級」(明確・持続的な学習意識等)を定める。	—	「普通高校必修科目「英語」課程綱要において4技能及びそれらの総合的応用能力の到達目標を定める。	卒業時の目標：CEFR B1レベルを設定(B1・1～B1・3)	
初等教育段階における外国語教育の導入時期		2001年 (平成13年)	1997年 (平成9年)	2001年 (平成13年)	2003年 (平成15年)	2011年 (平成23年)
外国語教育の開始学年		小学校 第3学年	小学校 第3学年	小学校 第3学年 ※導入当初は第5学年	小学校 第3学年	小学校 第5学年
各学校段階における外国語教育の授業時数	小学校	週4回以上 ・3・4年は短時間(30分)がメイン ・5・6年は短時間授業と長時間授業(40分)の混合、長時間授業は週2回以上 ※地域差あり	○2008年改定 ・3～4年は週2コマ ・5～6年は週3コマ ※1コマ40分、年間34週 ○改定前(2007年以前)は ・3～4年は週1コマ ・5～6年は週2コマ	週2コマ ※1コマ40分	週2コマ ※1コマ35～45分	週1コマ ※1コマ45分、年間35週
	中学校	週4回以上	1～2年は週3コマ 3年は週4コマ ※1コマ45分、年間34週	週4コマ ※1コマ45分	週3コマ ※1コマ45分	週4コマ ※1コマ50分
	高等学校	週4回以上	1年は週4コマ 2～3年は選択科目単位制 ※1コマ50分、年間34週	週5コマ (必修4, 選択1)	週3コマ ※1コマ45分	必修科目は3単位時間 他は選択科目
到達目標の設定		国のCAN-DOリストあり 「義務教育英語課程標準(2011年)」、「普通高校英語課程標準(2003年)」に記載	—	Can-DOリストあり 例) 台北市小学校言語学習領域英語課程指導要領において、小学校低学年～高学年向けリストを記載	国独自のリスト「KNL NNVN」を作成(1、2級～上級5、6級)、2014年3月から開始	—

(参考) 中国における各学校段階の英語教育の内容

対応学年	級	要求
外国語学校	九級	
高校3学年	八級	普通高校卒業時に要求されるレベル
高校2学年	七級	
高校1学年	六級	
中学3学年	五級	中学3学年終了時に要求されるレベル
中学2学年	四級	
中学1学年	三級	
小学5、6学年	二級	小学校6学年終了時に要求されるレベル
小学3、4学年	一級	

<八級の達成目標概要>

強い自負心と自主学習能力がある。身近な話題について、英語スピーカーと自然に交流できる。会話・文章の内容について、評論的な見解を表明できる。連続した、完全な短い文章を書くことができる。言語を使ったさまざまなジャンルの活動を、自ら企画、立案、実施することができる。これには、計画設定・実施、実験や調査の結果発表を含む。インターネット等のさまざまな教育資源を有効利用し、情報を得て処理できる。自主的に学習効果を評価し、有効な英語学習の戦略を立てることができる。言語コミュニケーションの文化的 content と背景を理解し、異国文化に対して、尊重・包容の姿勢を持つ。

<技能項目の指標目標(八級)>

級	リスニング	スピーキング	リーディング	ライティング
技能				
目標内容	1、口調による態度の違いを聞き取ることができる。 2、身近な話題についての討論や会話を聞き取り、要点を理解、記憶することができる。 3、簡単な文章の見解をつかむことができる。 4、ラジオ、テレビの英語ニュースのテーマ、大意をほぼ聞き取ることができる。 5、間接的な表現の提案、アドバイスなどを聞き取ることができる。	1、適切な語調とリズムで話すことができる。 2、タスクに沿って話し合い、計画を立てることができる。 3、実験や調査のプロセスと結果を報告できる。 4、準備をした後、一般的な話題について3分間スピーチができる。 5、日常的なやりとりの中で、意見、決断、抗議、苦情などを効果的に言葉で表現できる。 6、外国人の買い物や観光に同行するなどし、一般的な生活内で通訳ができる。	1、それぞれの資料の異なる見解や観点を読み取り、理解できる。 2、異なる文体の特徴をつかむことができる。 3、文章構造を分析し、難解な文や長文の内容を理解できる。 4、教員の助けを借りつつ、平易な文学作品を読解できる。 5、カリキュラムの規定に沿って、電子ブックやインターネット上の情報をつかみ、整理・処理できる。 6、授業の教材のほかに、36万語以上の読書をする。	1、構造化され、理論立った作文を書き、出来事を説明したり、自身の考えや見解を表現したりできる。 2、テキストをもとに、概要を書くことができる。 3、適切な文体を使い、筋の通った文章展開ができる。 4、文章や図表の情報をもとに、短い報告書やレポートを書くことができる。

② 高等学校における科目の再編

⌘ 目的:

- ① 4技能統合型の言語活動の充実
- ② 「話すこと」「書くこと」「考えること」
を強化する言語活動の充実
- ③ 発表(スピーチ&プレゼン)、討論・討議
(ディベート&ディスカッション)ができるよ
うにする

② 高等学校における科目の再編

⌘「外国語」(案):

○「英語コミュニケーションⅠ」(必履修)

※現行の「コミュニケーション英語基礎」は廃止とするが、
その趣旨を「英語コミュニケーションⅠ」に反映させる

※現行の「コミュニケーション英語Ⅰ」の構成・内容を改善

○「英語コミュニケーションⅡ・Ⅲ」(選択)

※現行の「コミュニケーション英語Ⅱ・Ⅲ」の構成・内容を改善

○「論理・表現Ⅰ～Ⅲ」(新設、選択)

※技能統合型の言語活動による発信力の強化

② 高等学校における科目の再編

⌘ 専門科目「英語」(案):

(「外国語」と同様の枠組みで内容を高度化)

○ 「総合英語 I～III」

※ 現行の「総合英語」を I・II・III の3段階で設定

○ 「ディベート&ディスカッション I～II」

※ 技能統合型の言語活動による発信力の強化

○ 「エッセイ・ライティング I～II」

※ 技能統合型の言語活動による特に「書くこと」による発信力の強化

③ 教科書の改善

高等学校:

「コミュニケーション英語」の教科書の問題点

⌘ トピックが單元ごとに大きく変わる

→ 深みのある思考や活動につながらない

⌘ 活動を前提としたリーディング内容ではない

→ 4技能統合型の活動を展開しにくい

③ 教科書の改善

高等学校「英語表現」の教科書の問題点

- ⌘ 学習指導要領の趣旨にそぐわない「文法事項を文脈なしで学ぶ教科書」が多い
- ⌘ 英語を使って表現する活動に結びついていない

③ 教科書の改善

中学校の教科書の問題点

- ⌘ 小学校の外国語活動が生かされてきていない
- ⌘ (日本独特の) 文法シラバスで構成されている
- ⌘ 総語数が圧倒的に少ない
 - 読む力がつきにくい/英語での授業がしにくい
- ⌘ 口語英語で使用頻度の高い get/give/takeなどの基本動詞の使い方が身につきにくい

アジアの英語教科書のレベルの比較

CEFR推定語彙サイズと日本及びアジアの教科書レベルの比較

CEFRレベル	推定語彙サイズ	日本	中国・韓国・台湾
C1/C2	8000語～	社会人？	大学
B2	5500～8000語	大学	高等学校
B1	3000～5500語	高等学校／大学	高等学校
A2	1000～3000語	高等学校	中学校
A1		高等学校	中学校
PreA1	約1000語	中学校	小学校

→日本の英語教科書のテキスト分量は、中国、韓国、台湾のテキストより平均して5～6分の1の割合しかない。

(参考)CEFRレベル準拠コーパスの分析結果

B2				3496語
B1				2894語
A2				1565語
A1				282語
PreA1				987語

※数字は見出し語化、スペリング・エラーなど修正前のもの。
 ※アジアの英語教科書を調査した結果に基づくもの。

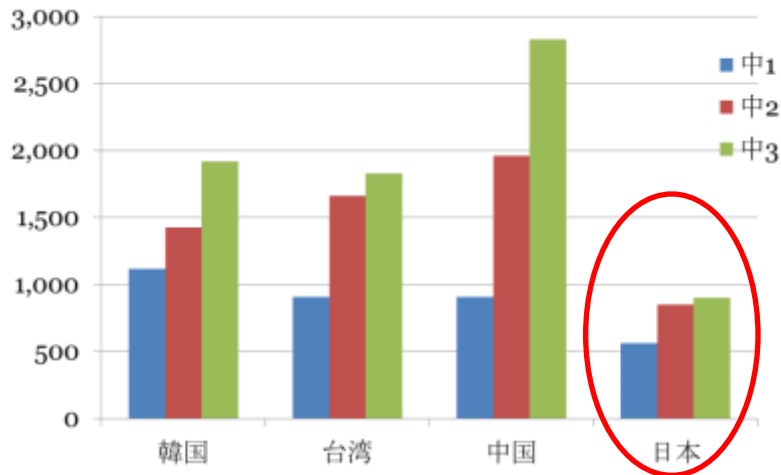
※「CEFR」: Council of Europeが作成した「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠」(Common European Framework of Reference for Language)。言語能力を6段階(A1,A2レベル:基礎段階の使用者、B1,B2レベル:自立した使用者、C1,C2レベル:熟達した使用者)に分けている。なお、PreA1とは、アルファベットや文字と音声の関係の習得が大きなハードルとなることなどのヨーロッパとは異なる言語文化事情を考慮して設定されている。

日本の英語教科書 vs アジアの教科書

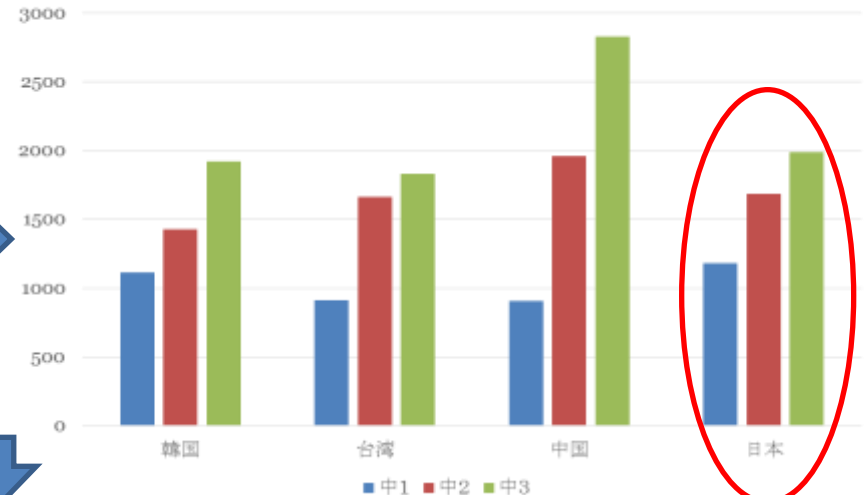
第3回外国語WG
投野委員発表資料より

- 語彙900語→1200語：実際は2000語近くに増加
- かなり何度の高い単語が中学レベルで出てきている

H20年度版中学英語教科書 vs アジアの教科書



H28年度版中学英語教科書 vs アジアの教科書



- ただし、選定されている語彙には統一感がない。
- 中学で出てきてほしいA1レベル1000語余りのうち、7種の教科書で共通する単語は343語
中3で平均2000語出ていても、共通する語は413語

主な英語の資格・検定試験の出題意図・語彙数 等

試験名	目的・出題意図	語彙数	国際通用性 ①実施国数 ②主な活用地域 ③海外団体との連携
Cambridge English (PET:CEFR B1)	英語圏における日常生活に必要とされる実践的な英語力があるかを評価する	3,000語程度 (*1)	①約130か国 ②英国、欧州、オーストラリア、ニュージーランド ③CaMLA(米国ミシガン大学)、OET(豪州)等
実用英語技能検定 (2級: CEFR B1)	英語圏における社会生活(日常・アカデミック・ビジネス)に必要な英語を理解し、使うことができるかを評価する	4,000語程度 (*2)	①約50か国 ②アメリカ、オーストラリア、カナダ等 ③アジア6地域7団体およびCRELLA(英国)
GTEC CBT	英語を使用する大学で機能できる(アカデミックな)英語コミュニケーション力を測る	3,000～6,000語程度 (CEFR C1まで)	②北米(ELS Educational Services)
GTEC for STUDENTS	英語によるジェネラルな状況におけるコミュニケーション能力を測る	3,000語以下 ※タイプによって異なる (CEFR B2まで)	
IELTS	英語を用いたコミュニケーションが必要な場所において、就学・就業するために必要な英語力があるかを評価する	5,000～6,000語程度(*2)	①約140ヶ国以上 ②EU諸国、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、アメリカ等
TEAP	EFL環境の大学で行われる授業等で行う言語活動において英語を理解したり、考えを伝えたりすることができるかを評価する	2,000～5,000語程度 (タスクにより異なる) (*2)	③CRELLA(英国)
TOEFL iBT	高等教育機関において英語を用いて学業を修めるのに必要な英語力を有しているかを測ることを目的とする。	(R) 3,000語で90.45%をカバー 5,000語で95.37%をカバー (L) 3,000語で96.22%をカバー(*3)	①約130か国以上 ②英語圏(北米、オーストラリア、ニュージーランド等)、非英語圏(ドイツ、オランダ、トルコ、韓国等)
TOEFL Junior Comprehensive	英語を母国語としない中高生の英語運用能力を世界標準で評価する。	3,000語程度 98%の単語がセンター試験に出現(*4)	①8か国(実施国数拡大中、2技能については既に50か国以上)
TOEIC / TOEIC S&W	和文・英文和訳などの技術ではなく、身近な内容からビジネスまで幅広くどれだけ英語でコミュニケーションができるかということの評価する。	4,000語以上 (*5)	①約150か国

*1: English Vocabulary Profile Wordsに基づいてカウントした概算 *2: BNC(British National Corpus) *3: BNC/COCA word-family lists < 第1回連絡協議会資料より > *4: 2006年以降のセンター試験。グローバル・コミュニケーション&テストング独自調査(2014年) *5: 外部リサーチャーが独自に行った調査結果「英検2級より多いがテレビ、ニュース番組よりは少ない」からの推計値

教科書が変わらない理由

⌘ 力関係

学校の教員 > 営業担当者 > 編集担当者 > 執筆者

⌘ どこを変えればよいか？

① 学習指導要領

→ 英語使って表現する活動の割合が充実
するような方向で明確に記述

② 教員の意識と指導法 → 「教員研修の強化」
と「大学入試 & 高校入試の改革」

(参考) 英語教育の在り方に関する有識者会議(平成26年9月)抜粋

(2) 教科書・教材に関する改善の方向

(中学校・高等学校)

- 今後の英語教育において求められる教科書・教材の内容や構成については、世界的に広く用いられている教材を参考にしつつ、英語が第二言語ではなく外国語である我が国の環境も踏まえ、英語で行うことを基本とした授業を通じた総合的なコミュニケーション能力の効果的な育成に資する教科書・教材の開発が必要である。
- 今後の教科書・教材については、授業において効果的にコミュニケーション能力を育成するため、文脈に位置付けられた文法事項などの言語材料と、言語の使用場面や働きを意識した言語活動とが総合的、かつ、効果的に関連付けられた授業をより一層展開しやすいように構成等を工夫することが必要である。
- あわせて、言語材料については、小・中・高等学校を通じて、学校段階間の学習内容を十分留意して、比較的易しいものから段階的に繰り返し触れることによって定着が図られるものが望ましい。
- さらに、できる限り多くの英語に触れる機会を増やして英語を英語のまま理解することができるようになるとともに、思考力・判断力・表現力などを養うという観点が必要である。
- 教科書・教材の作成・活用に当たり、次期学習指導要領の改訂において、そのような趣旨をより徹底するとともに、教科用図書検定基準の見直しに取り組むべきである。

評価法が変わらない理由

⌘ 英語力

どのレベルまで英語力を身につけさせるのかの目標がはっきりしていない

⌘ 横並び主義

他の教科と同じように定期試験重視

⌘ 不完全なシラバス

学期当初にどの活動を何点として評価するを決めていない(発表できない)

評価法を変える方法

⌘ 英語力

→国が目標設定＋4技能統合型指導の重要性をさらに明確に

⌘ 横並び主義

→英語は「言語」科目であり、「外国語」科目であることを学習指導要領等で明確に

⌘ 不完全なシラバス

→教員研修、養成課程における指導の改善